

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幡ヶ谷九〇四 電話(03) 3377-4649 FAX(03) 3299-5367
振替 〇〇-〇〇-九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

みんなの力で四・一三集会成功を

「いざ鎌倉」の心意気で

滝野 忠……………2

〇四年「春闘」への基本視点

編集部……………3

祝・郵政全労協・郵政労働者香川県支部発足

赤峰 正俊……………4

前途は多難

伊勢 太郎……………5

―第二回六ヶ国協議をめぐって―

クーデターは失敗？

……………7

―ハイチ政変―その後―

JR新宿駅にエレベーター七台設置決まる

滝野 嘉津子……………8

―利用者・障害当事者参画で安全・快適・利便な駅に―

低下する信頼、しかし必要

……………11

―労働組合意識調査から―

読者からのおたより

……………13

旬刊 社会通信

NO. 897

二〇〇四年四月一日号

二〇〇四年四月一日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

みんなの力で四・一三集会成功を

いざ鎌倉」の心意気で

二月末から三月始め、「国労闘争団とともにたたかう会」と連携する全国の仲間二十六名と北海道国労闘争団を訪ねた。旅は私にとって生活の一部であり、闘争団員・家族はファミリーである。彼らには「厳しい時代を切り拓くオルガナイザーであつてよ」と想いを述べつづけた。

オルガナイザーと聞けば、なんか堅苦しいことのように想いがちだ。オルガナイザーとは生の己を気迫をもつて訴えることで一人ひとりと仲良くなり、人間としての信頼関係を築き、国鉄闘争勝利への気持ちを交い合わせることである。国鉄闘争のようなたたかいはオルグする者とされる者、あるいはオルグされる者がオルグする者と融け合い組織を生きたものに発展させることができる。組織づくりとは「人間づくり」であるということだ。

今度の旅は数多い交流経験でも、ひととき工夫されたものだった。二十六名が羽田に集い、稚内、女満別、旭川をめざし飛び立った。稚内組は音威子府、女満別組は北見で報告集会をし、紋別、美幌、帯広をめざし、旭川組は同じく名寄、深川、留萌へ。こうして北海道十三闘争団中十の闘争団を一気に訪ねた。

十七年という歳月は闘争団員、そして支援する者にとって、あまりにも過酷で長い年月だ。経済状況、政治状況、地域・職場状況を大きく変えた。闘争団員・家族の生活状況も例外ではない。そうした中、闘争団員・家族は「なにがなんでも勝ちたい、汚名をはらしたい」とがんばりつづけている。この姿に二十六名全員が感銘をうけ、「さらにがんばりつづける」思いを闘争団員・家族とともに共有できたのではなかったか。

国鉄闘争は今「最終局面」に突入し、最後の「ヤマ場」にある。過去十七年、「これがヤマ場」とふんばりつづけた。しかし、今こそ真正正銘のヤマ場である。「ヤマ場」を勝利にむかわせる課題は大きく二つである。鉄建公団原告がおこなっている裁判闘争を全国の仲間が数万、数十万の大衆行動で支えること。二つは国鉄分割民営化で首切られた千四百十七名の仲間が、一丸となって地位確認の訴訟にとりくむ態度を一日も早くつくりあげることだ。

鉄建公団に責任と解決能力があることは、横浜人活事件で解雇された五人の仲間が無罪を勝ち取ったばかりか、鉄建公団に採用されたことにもっとも具体的に示された。鉄建公団裁判はこれから秋にかけもっとも重要な審議に入る。裁判の日時まで「解決の当事者はわれわれだ」との意志を裁判所や国、さらにJRに突きつけ、相手が「解決しなくては」との状況をつくり出さねばならぬ。

その第一弾のとりくみが四月十三日におこなわれる集会である。この集会の成否にこれからのたたかいの多くがかかっている。この集会の成功のため全国からも共同しようと呼

回の交流の旅は企画されたのだった。全国で国鉄勝利で労働運動再生をとがんばりつづける仲間たち、この集会成功に全力をつくし合い、東京にはせさんじよう。いまは「いざ鎌倉」の時。四月十三日、午後六時三十分、日比谷公会堂。友を誘って会おうよ。(滝野忠)

○四年「春闘」への基本視点

ユニオン連合の中心組合は金属労協（IMF・JC）、自動車・電機・鉄鋼・造船等の基幹産業の労働組合で構成。金属労協は結成以来（一九六四年）、①労「使」はパートナー、②春闘（大幅賃上げ）ナンセンスの立場で、賃金は企業の支払い能力の範囲内でよしを原則とする。したがって、春闘という言葉も使わない。「春季生活闘争」がユニオン連合流の正確な表現となる。

この数年、ベア（賃金水準のベース・アップ）要求は民間大企業労組から消えた。ベア要求する組合は旧総評の中心組合だった私鉄総連、全国一般などごく少数で、〇四「春闘」では、賃金カーブ（定昇）維持をいうばかり。組合が要求しないのだから、会社は答える必要もない。そこで浮上してくるのが、企業業績に見合った一時金要求、会社の儲けに妨げにならない「働き方」（①年金支給年齢引き上げにともなう再雇用制度、②テンポラリー（不安定）労働者の待遇改善、③首切り「自由」を前提とした職業訓練制度、④育児・介護休職制度新設）となる。

企業の儲けは労働力の売買、搾取から生まれる。だから、企業は労働力の価格、賃金引き下げに躍起となる。日本経団連の前身である旧日経連は「経済非常時を覚悟すべきだ」（日経連タイムス『主張』、〇一年九月六日付）で、「人件費も二―三割下げなければ、内外価格差は下がらない」と、二―三割の賃下げを宣言した。この宣言にもとづいて、労「使」が協調しおこなっているのが「春闘」―正確には日本経団連がいう「春討」―である。

日本経団連の「春討」の中味は、労働組合の産業報国会化、つまり、「お国のために、企業のために労働者は滅私奉公せよ」というもの。滅私奉公だけでは矛盾が拡大するから、「業績向上分はボーナス・一時金で」というのである。

〇四年春闘は、ユニオン連合と日本経団連のパートナー・シップどおりに進行した。ベアゼロ定着、諸手当廃止、企業業績のボーナス反映である。

大企業では正規労働者からテンポラリー労働者への切り替え、子会社化（退職・再雇用、転籍による最大五〇%の労働条件切り下げ）が嵐のように進行している。「仕事があるだけでもありがたいと思え」という労・「使」の脅迫で、労働者の意識は萎縮し、目下、反撃の状況は見えない。

資本のいう成果給・業績給とは、古い言葉でいえば出来高払い。この出来高払いの進行に、財界の親玉たちは「賃上げだけでなく、幅広いテーマを労使で討議する『春討』の色彩が強まったことは望ましい」（日本経団連会長）、「ベアがなくなるのはいいことだ」（日本商工会議所会頭）と満面に笑みをたたえたたまわく。

他方、連合会長は、ボーナスが満額回答だったことに、「目標がほぼ一〇〇%にちかい形で解決」、「賃下げは労働側の努力で完全に阻止できた」とこれまたニコニコ顔である。労「使」ともに満足との結果表明である。現実はいええ、大企業正社員の数は減り、正社員の労働条件は悪化の一途をたどる。この背景のうえに、不安定雇用労働者はふえる一方なのだから、労働条件は下がるだけとなる。発火点は近づいている。(編集部)

祝・郵政全労協・郵政労働者香川県支部発足

中曽根「行革臨調」攻撃の最終目的に「憲法改悪」|| 「軍事国家」が据えられていたことは、周知の事実です。その目的を達成するための第一戦略として「抵抗体の一掃」|| 「連合結成」が日論まれたのです。

現実には、たぶん中曽根が想像していた以上にうまくいったと思われる。全電通を筆頭に旧総評の「名門」は、総崩れしたばかりか、先を競って旧同盟を凌駕する勢いで「労使協調」という名の下で、翼賛化していきました。その時に標的にされたがために争議を抱え、独自の闘争路線を選択した国労は、今や見るも無残な醜態をさらしています。これを見て「やはり自分たちの選択は正しかった」と、ますます翼賛体制を強める連合路線は、もはや「大政翼賛会」の基盤をつくる「産業報告会」といつても過言ではありません。

数多くの先輩たちが、計り知れない犠牲を払い積み重ねてきた労働者の権利は、連合発足以降の十数年で、すべて吐き出したばかりに留まらず、物さえ言えない専制的な職場におとしめたばかりか、組合指導部は、組合員の重石役として、権力の「安全弁」に成り下がっています。

総評が連合に変わったわけではありません。社会党が社民党に名称変更したのでもありません。当然、全通が「日本郵政公社労働組合」に名称が変わるだけなどと言う理屈は、常識ある労働者階級には通用しないことです。しかし、その最低限の「常識」さえも、労働者から奪い去る十数年でした。今日、圧倒的に無気力化され、無関心を装う労働者大衆から時代を変える迫力は期待できません。国労しかり、自治労・教組・N T T労組しかり、そして全通はその先頭を走っているようです。そのような情勢の中で、皆さんは驚異的な少数派として「人らしく生きる」道を選択したのです。この少数派が消えうせたときに、中曽根や小泉が望む軍国化が訪れるのです。

今回、四国の地で郵政全労協を起ち上げるにあたって、大変な圧力や妨害があったことは容易に想像できます。昔の仲間との人間関係が軋み悲鳴を上げていることでしょう。しかし、今しかなかつたはずです。この選択が歴史的に感謝される日が訪れるように、闘い抜かねばなりません。

今回の、須藤さんをはじめ、結集された少数派の皆さんに心から敬意を表し、私たち国労原告団も、微力を自覚しつつ総ての行動に連帯する決意を表明します。ともにがんばり闘い続けましょう。

(国労大分原告団 赤峰 正俊)

前途は多難

―第二回六ヶ国協議をめぐって―

国内政治、外交、戦争

外交は国内政治の反映であり、外交交渉の破綻・決裂が即戦争となることはけっして稀ではない。朝鮮半島の平和と安定、非核化をめざす六ヶ国協議は、戦争への危険をつねにはらんでいる。しかし、戦争への抑止力も関係諸国の経済・政治的状况から浮かび上がる。六ヶ国協議構成国は①朝鮮半島を分断した三十八度線で国境を接する朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）と大韓民国（以下、南朝鮮）、②北朝鮮と国境を接しかつては「同志」として友好・連帯したロシアと中国、③朝鮮半島をかつて植民地とした日本と朝鮮戦争を起こしたアメリカである。六ヶ国が外交に臨む態度は国内政治に特徴づけられる。北朝鮮は国家成立時から「戦時共産主義」体制を強いられた。社会主義体制崩壊は、アメリカ、日本による北朝鮮包囲網づくり、ロシアの経済援助停止をもたらし、「戦時共産主義」の様相はさらに強くなっているかのようだ。「拉致」はこうした状況下起きた不幸な事件である。

「作戦計画五〇二七」

北朝鮮の核問題の根本は、アメリカの北朝鮮「敵視」の政策にある。アメリカは北朝鮮がNPT（核拡散防止）条約から脱退を宣言した一九九三年三月十二日以降、北朝鮮を今でも攻撃するかのようにならした。その典型は一九九四年五月十八日、クリントン大統領が「作戦計画五〇二七」にもとづき、開戦準備をペンタゴン（米国防総省）に命じたことである。

「作戦計画五〇二七」とは、①陸軍五十七万人、②戦艦二百隻、③航空機千二百機、④五空母軍団を動員し、開戦九〇日で北朝鮮の首都ピョンヤンを攻略するとの作戦だった。図上作戦の結果はホワイト・ハウス、ペンタゴンを驚愕させた。

ピョンヤン攻略までの九〇日間に、①米軍死者五万二千人、②南朝鮮軍に四十九万人の死傷者、③南朝鮮の首都ソウル周辺的一般市民に百万の死者が出るとの恐ろしい結果が出たのである。これに驚いた当時の金泳三大統領はアメリカが一方的に朝鮮戦争を再開しても一兵たりとも韓国軍を動かすつもりはないとクリントンに言い渡したという。

中・ロは資本主義化にまっしぐら

ソ連は権力基盤だった共産党を解党したことで自己崩壊し、中国はソ連の「教訓」をもとに、「社会主義市場経済」という共産党が主導する資本主義の道を選択した。ロシアは北朝鮮への経済支援を停止、中国は北朝鮮との友好協力条約を維持している。

中国、ロシアは資本主義化、中国は経済成長持続、ロシアは石油増産で発展の条件をつ

くりたいとする。そのためには朝鮮半島の平和と安定が必須の条件となる。中国の「灼熱のるつぼ」は外国資本で成り立っており、戦争は、中国経済を破滅に追いやる。ロシアと同様である。

中国、ロシアはこうして、北朝鮮と日米韓三国との緩衝国の役割を果たしたいとする。中国の「存在感」に比し、ロシアが薄いのは両国の政治・経済力の相違である。

日米と韓にズレ

戦争になってもっとも大きな被害を受けるのが南朝鮮である。朝鮮半島の平和と安定が南朝鮮最優先の国内政治課題となり、外交はその実現をめざすことが第一義となる。

南朝鮮は日本とアメリカとの間に二国間軍事条約をもつ。だから、六ヶ国協議で南朝鮮は日・米と連携する。しかし、「完全に検証可能で後戻りできない形で北朝鮮の核を取り除くこと。そこにはプルトニウム、ウランの核兵器計画もふくまれる」との日・米合意に協調しながら北朝鮮との「対話」「経済支援」重視の姿勢をとる。

日・米はといえば強硬一本槍で北朝鮮に譲歩をせまる。アメリカは北朝鮮を「悪の枢軸」と名ざし、敵視政策を強め、武力侵攻すらにおわせる。

日本は「反動化」のテコに北朝鮮を利用することに大童（おおわらわ）、「拉致」への強硬姿勢で幹事長職を勝ち取った安倍晋三は北朝鮮「脅威論」をひたすら強調することで、地位を守り次への布石としようとする。

北朝鮮への経済制裁を可能とする外為法はすでに成立、そして今、船の入港を規制する法案までもが国会にかけられている。武力による交戦、戦争ではない。しかし、これらは戦争を準備する戦争政策そのものに他ならない。

アメリカは中東（パレスチナ問題）、イラク、アフガン問題で手がいっぱい。北朝鮮は当面は日本にまかせようというのであろう。

協議は継続へ

六ヶ国協議はこうした各国の思惑のうえにある。二月末おこなわれた第二回六ヶ国協議は、これら六ヶ国の最大公約数を集約することで終わった。その内容とは――

①相違は残るが、互いの立場に関する理解を深めた。

②朝鮮半島、地域全体の平和と安定を維持するため、核兵器のない朝鮮半島を実現する。

③六ヶ国協議のプロセスを継続する。そのため、第三回協議を〇四年第2四半期に開き、作業部会を設置する。検討事項は外交チャンネルで決定する。

④というもので、作業部会での検討事項は①核開発放棄にいたる道筋、②北朝鮮への「安全保証」―武力介入放棄―の文書化、③北朝鮮への支援のあり方になるといわれる。

過去二回の六ヶ国協議で明らかになった北朝鮮の基本原則は①核問題はアメリカの対北朝鮮敵視政策にある、②アメリカが敵視政策を放棄すれば核兵器計画を放棄できる、③同時行動原則にもとづいた一括妥結が一貫した立場、④今後の展望は全面的にアメリカにか

かっているというものだ。そのうえに、北朝鮮は核凍結と引きかえに、①テロ支援国家からの除外―敵視政策放棄、②経済制裁解除、③エネルギー支援を求める。

これにたいし、中国、ロシア、南朝鮮は北朝鮮との融和―たとえば経済支援などに重点をおいているのに、日本とアメリカは「核放棄表明」を一義とし、これに拉致問題をかちませる。南朝鮮、中国、ロシアは「拉致は二国間問題」との立場だが、日本は拉致を同時解決問題と主張する。アメリカはそれを支援する。

「拉致」は二国間の問題

北朝鮮の拉致問題への見解は①拉致問題は基本的にすべて解決、②残された問題は、朝日平壤宣言を履行する過程で解決、③六ヶ国協議とは関連はないというもの。

六ヶ国協議継続は決まった。次の関心はいつ開かれるか、作業部会ではどういうテーマがどのような目的で開かれるかである。本来なら―地理的、歴史的に―もっとも積極的に北朝鮮との融和をはからなければならぬ日本が、「拉致」を口実にアメリカ以上の強硬論を主張している現状、南朝鮮の大統領弾劾決議、台湾総統選挙の混乱、さらにはテロの世界的拡大など六ヶ国協議のゆくえは多難である。

クーデターは失敗？

―ハイチ政変―その後―

ハイチで三月一六日、新内閣が発足した。新内閣の権力基盤はOAS（米州機構）の盟主アメリカと元宗主国であったフランスを中心とする約五千の多国籍軍である。

ハイチの「反乱」とはなんであったのか。少ない報道と資料から考えられるのは、この「反乱」は中南米諸国にとって特有の旧軍人を中心とする勢力による「アリストイド政權打倒」を目的としたクーデターであったことだ。ハイチではじめて民主的な選挙がおこなわれたのは一九九〇年。アリストイド神父が大統領に就任した。しかし、九ヶ月後、軍のクーデターで大統領の座を追われた。アリストイドは四年後の一九九四年に、アメリカ海兵隊の力で復権した。この時、アリストイドは―ということはおそらくアメリカの意志が強く働いたのだろうか―軍を解体した。解体された旧軍人はアメリカや隣国のドミニカに亡命、逃走した。彼らが今度の「反乱」を起こした首謀者たちである。解体された軍に代わる武装部隊はピストルしかもたない五千三百人の国家警察部隊。それにたいし「反乱軍」はアメリカ製のM16、迫撃砲で武装していた。

中米諸国、とりわけカリブ海に浮かぶ島々からなるカリブ海諸国はまずしい国々にて正確な情報は皆無にちかい。

今回は、ハイチの「反乱」がこれら地域の日常ともいえるべきクーデターであったことをお伝えし、次の報告ではアリストイド前大統領、そして「反乱軍」、さらには現政權がアメリカとどういう関係にあるかを調べてみたい。

JR新宿駅にエレベーター七台設置決まる

―利用者・障害当事者参画で安全・快適・利便な駅に―

声におされ突然の発表 JR東日本は去る三月十六日、JR新宿駅ホームにエレベーターを設置するとはじめて発表した。どのような設計なのだろうか、一番欲しかった『西口』はどうなるのか―小田急線、京王線、地下鉄利用者は大きく遠回り?」等々が頭を過ぎるが、「大いなる前進」として喜びたいと思う。新聞もエレベーターの設置を求める声が続いたことに対応するものと報じていたが、先月、JR新宿駅長室で私が出た助役さんも、「このごろ新聞に何度も載るんで毎日苦情の電話や投書が多くなって…」とこぼしていた。新宿駅南口でのリレートックでも、「JR新宿駅ホームにエレベーターを!」のチラシを渡すと、「えっ、新宿駅にエレベーター無かったの?」と、反射的な疑問が大勢の方々から寄せられた。こうした利用者の声が頑ななJR東日本を動かした。運動の成果だ。発表されたエレベーター設置計画内容は、①総工費十五億円、二〇〇六年度までに七台(定員十一名乗り)設置する、②南口コンコースから各ホームへ今年度から工事を始める。③〇六年度までに現在の中央線特急ホームを除く七つのホームで順次、エレベーター稼働する。④現在使用停止中・改築中で二〇〇四年秋開始予定中の第三ホームについては、東口、西口方面へのルートを確認するため、コンコースとホームと連絡地下通路の三階停止のエレベーターとする、というものだ。

JR新宿駅に乗り入れている小田急線、京王線、丸ノ内線、大江戸線には駅周辺から改札・ホームまですでにエレベーターやスロープが設置されており、一日一五〇万人の乗降客を誇る日本最大のターミナル駅・JR新宿駅のホームにエレベーターが設置されなかったことは信じがたいことだった。

異常深刻JR新宿駅 JR新宿駅を車いすで利用する人は今一日百人余り(十年前は十数人)、大混雑のホームではエスカレーターを「車いす対応」モードに変換することも困難で、通常の運転モードでの使用を余儀なくされ、車いすこと斜めに、モノのごとく運ばれ不安と恐怖のなか「首を痛めた」、「将棋倒しになった」等の事故や車いすの破損事故も起きていた。事故後、心の傷を深くし、家に引きこもってしまった人も少なくない。JR新宿駅の車いす介助チームの駅員さんも介助中、エスカレーター上で将棋倒しになるのをおくい止めようとして腰椎を捻挫した事故がこの二年間に二件発生していた。これらがきっかけとなって、昨年七月「JR新宿駅の安全とバリアフリーを考える会」が発足し、「会」はまずJR新宿駅利用アンケート調査にとりくんだ。

調査結果は、将棋倒しになった、肋骨にひびがはいった等々の事故や、バリアの多いJR新宿駅の利用を差し控えている、我慢して利用している、大規模工事も重なって混雑が余りにも酷い、ホームやコンコースを歩くのも困難、線路に落ちる危険すら感じる等々の利用状況が浮き彫りになった。エレベーター設置は待たなしと回答した人は約九〇%。急ぎ足での混雑のためエスカレーターは上りも下りも、ホームと電車の段差・すきまを埋める装置を! ホームの改良を! 駅係員を増やして! など具体的な解決策が示された。

車いす使用者は、エスカレーターを車いすモードにしてくれない、駅員に介助を依頼するが長いこと待たされる、車いすモードへの転換時、乗降客の行列が出来るので頼みにくい、段差と隙間（すきま）が大きいのにホーム渡り板を使わない等々の項目に五〇%の方向が回答した。自由記入欄には、エスカレーター上での怖い思いや不手際、事故の際の状況、ホームのエレベーター設置や混雑解消、駅要員増への期待などが余白にギッシリ。ベビーカー利用者は「親は命がけ」と傍点矢印欄外に泣き叫ぶかのように書き記してあった。

知らされなかった新宿区 障害を担った当事者団体が結集している。「誰もが使える交通機関を求める全国行動東京実行委員会」は一九八八年結成当初から十五年余の長きにわたって、JR新宿駅のエレベーター設置を訴えつづけ、駅座り込み要請行動をも行ってきた。また、各人がJR新宿駅を利用しており、その時々への対応と重ね合わせて駅長室をたずね、要望や抗議などをおこない、それぞれが命がけの闘いをつづけてきた。

「JR新宿駅の安全とバリアフリーを考える会」は、地域の働く仲間のあつまり、東京西部全労協や新宿地区労などの応援をうけながら新宿南口でのリレートークやチラシまきなどをおこない、昨年十月には「JR新宿駅にエレベーターを！」とJR東日本本社に要請し話しあった。JR東日本社は「利用客が多く、駅の構造からも早急な整備が厳しい。平成二十年までの駅改良工事の中などの設置を検討する」と述べるのみだった。さらに、同十一月には国土交通省に駅の安全問題として強力な指導監督を要請したが、ホームのエレベーター設置計画は少しも見えてこなかった。

新宿区は昨年末、交通バリアフリー基本計画策定協議会を設置し、非公開を公開制にし、区独自のアンケート調査を実施し、その結果をふまえ、重点地区を新宿駅・新宿3丁目周辺、高田馬場周辺地区とした。新たに委員二名を公募し、五月には駅とその周辺のワークシヨップ（バリアチェック）を実施し、本格的な協議がはじまろうとしていた。協議会委員は、学識経験者、都・国交省など関係行政機関、道路管理者、公共交通事業者、都公安委員、区民、区。その中、区民委員は五名。内訳は、電動車いす使用の身体障害者、視覚障害者、高齢者、商店連合会、町会連合会であるが、聴覚障害者、知的障害者、内部障害者、妊婦や幼児をかかえたお母さんも交通弱者であり委員に入れるべきとの指摘があった。JR東日本の今回の突然の発表について新宿区の担当の方は、「我々も新聞報道を見て初めて知った。関係者に連絡したのか聞いたところ、プレス発表のみだという。エレベーターはJR東日本のお金で設置する。国の方針で乗降客一〇万人以上のところは交通事業者のお金で設置することになっている。出せる資料は出して欲しいと交渉した。そこで出てきたのは、JR東日本ニュースA4の『エレベーター設置計画のお知らせ』と簡単な『別図』（エレベーター設置見取り図）だけだった」という。

JR新宿駅は今東京都や同新宿区、JR東日本などで構内や周辺地域の再整備をおこなっている。同駅の東口と西口を結ぶ自由通路の新設、南口バスターミナル、商業ビル建設等々だ。自由通路とバスターミナルは二〇一〇年度にも完成する予定という。

JR東日本は「JR新宿駅を乗降客日本一の座にふさわしい充実した施設に変える」としているが、建物がいかに立派になっても、高齢者や赤ちゃんお母さん、障害を担った方

々など誰もが一緒に安心・安全、快適に使える駅でなければダメだ。計画段階で個々の工事段階で、これまで当事者参画がなされて来なかったし、説明会の呼びかけもなかった。

当事者参画が決めて 阪急伊丹駅では計画・設計に先立って当事者参加の委員会をつくり、事業者が主体的に計画と設計にユニバーサルデザイン（誰にでも優しいデザインの考え方）を取り入れる姿勢を持ち、委員会は市民当事者、行政、事業者、大学関係者およびコンサルタントで構成され、利用者と専門家については委員参加だけでなく広範なヒアリングとアンケートを行ったという。

私も昨年夏阪急伊丹駅を利用し、伊丹市役所に行ってきた。市の担当者は当時をふりかえり、「委員会は当初はすれ違う議論も多かった。障害者は自分の立場から要求を曲げず、事業者は技術的・予算的制約からその要求を満たすことは困難として対立した。しかし、障害者は専門的知識を勉強し、事業者はその要求の意味と必要性を具体的に理解しようと努力し、ねばり強い委員会の議論の中で思いもつかなかったアイデアが設計に取り入れられ合意形成が行われた。とにかく考えて工夫した」と語っていた。エレベーターに関しては、利用者の立場からの位置の変更をおこなった。設計当初は中央部の奥まったところにあつたが、わかりやすい駅前広場に面して、シースルーエレベーターを設置。さらに混雑時にも車いす使用者が利用できる大きさとして十五人乗り、二十一人乗りの二基となった。音声による到着案内や押しボタンに熟知用の凸凹もつけられた。その他移動しやすい、利用しやすい、行きやすい、人に優しい配慮をさまざまに工夫し安心して使えるものとした。

一九六〇年後半から七〇年代初頭、人格も自由もブライバシーも無視されてきた施設での生活、あるいは大人になっても家族に依存し家の中で閉じこもって暮らしていた障害者は、自立と人権の確立を求めて立ち上がった。一九八一年からスタートした国際障害者年の「完全参加と平等」は、自立と社会参加、ノーマライゼーションの理念を広め福祉の街づくりの関心を高めた。自立生活運動の中で電動車いすが普及し、介助なしで公共交通を利用する障害者が増えた。公共交通にバリアがなく、介助なしで、誰もが平等・快適に移動できること、これは社会参加の基本だ。公共交通にバリアがあつては通勤、通学、通院、買い物、レクリエーションなど夢の世界…、家に閉じ込められ人らしく生きられない。

JR新宿駅西口には、今年二月、車いす用階段昇降機（エスカル）が増設され、ほっと一息だが、これはベビーカー利用者や杖や歩行器利用者は使えない。やっと設置されるJR新宿駅のエレベーターは高齢者も車いすも赤ちゃんもお母さんも誰もが一緒に使える納得のいくものであつて欲しいと心から願う。関係者の意見や説明を求めていると思う。

「誰もが使える交通機関を求める全国行動東京実行委員会」事務局の松井俊次さんは、今回の発表に関して、「私鉄との乗り換えへの配慮、『西口』にどうしても設置できないのか。できるホームがあるとすれば先ず『西口』優先で。エレベーターの大きさが十一人乗りでは電動車いす一台と介助者、ほか一人か二人しか乗れない。混雑しているマンモス駅・JR新宿駅は少なくとも二十二人乗りが必要。でないと譲り合いの心が、急いでいるから仕方ないや…にかき消され結果的に障害者は使いにくいものとなる。みんな急いでいるよ。そういう感情が出て来ちゃう」と強い口調で語った。問題はこれからである。（嘉）

低下する信頼、しかし必要

—労働組合意識調査から—

連合は「労働組合の現状と将来はいかにあるべきか」と、中坊公平氏を座長とする連合評価委員会をつくり、その最終答申（昨年大会に提出）を、重く受け止めるとした。その結果、連合および連合傘下組合に「自己改革」、「自己革新」が大いに流行している。連合は自己改革の一環—じつはJCを中心とする民間連合本来の主張—として、(1)賃金ふくむ労働条件は産別の責任、連合の調整。政策は連合の責任、産別の協力、という方針を本格化し、連合が統一要求基準を示すことをやめた。(2)新たな方針は中小・地場組合に対する要求目安（賃金底上げ等）、連合ミニマムウェッジ月十四万六千円を示した。

大合理化がすべての産業・業種企業のなかで吹き荒れ、賃金は百万単位で切り下げられている。このようななかで十四万六千円の最賃要求はなにを意味するか。

連合傘下組合員は今の労働組合についてどんな感想をもっているのだろうか。最近の意識調査、(1)連合総研「労働組合に関する意識調査」（〇三年四月、二十〜五十代の民間労働者、千六百九十三人）、(2)電機連合「組合組織に関する意識調査」（〇三年一月〜二月、組合員二万百四十六人）、(3)UIゼンセン同盟「意識調査」（〇一年十二月、組合員九千九百四十三人）からその特徴を見る。

組合が会社に譲っている

連合総研では、①労使関係について「労働組合のイメージ・考え方」、②春闘の役割、③今後の労働組合のあり方などを問うている。

労使関係については、「大幅に組合が会社に譲っている」三一・七%。「組合が会社に譲っている」とする者が四九・二%で約半数になる。これにたいし、「どちらかといえば、会社が組合に譲っている」七・一%、「大幅に会社が組合に譲っている」〇・九%で、「会社が組合に譲っている」とする者はわずか八・〇%にすぎない。他の回答は「どちらかが他方に譲っているということはない」一七・〇%、「わからない」二四・三%。

それでも労働組合は必要

こんな意識状況下、「労働組合は必要か」との問に、「ぜひ必要」二二・六%、「どちらかといえばあった方がよい」四九・七%で、「必要」とする者が七一・三%に達する。これにたいし「ない方がよい」はたった二・六%、「あってもなくてもよい」二五・二%。結果は、「それでも」労働組合は必要という、労働者の当たり前前の意識である。

では、労働組合員は労働組合になにを求めているのだろうか。「雇用の安定」六〇・七%、「定期昇給の維持・賃上げ」五七・八%、「ボーナスの維持・改善」四二・二%、「福利厚生」の維持・改善「三八・三%」、「労働時間短縮・休暇制度の充実」三三・一%の順であり、他に「倒産などの時に救済措置をとってくれること」二四・一%、「人事考課の

公正さの確保」二三・七%が目立つ。

そして今、組合員は労働組合活動が社会・企業にどのような影響を与えていると思っているのだろうか。社会にたいしては「労働者の権利が守られる」七三・八%、「労働条件がよくなる」五〇・一%がだんとつで「男女間の雇用面での平等が進む」二四・四%、「社会保障が充実する」二二・一%、など。企業にたいしては「福利厚生制度や職場環境が改善される」五三・六%、「経営に従業員の意見が反映される」四八・八%、「不公平な人事考課が少なくなる」二四・三%、「人員削減に歯止めがかかる」二三・一%など。これらの回答の他に「何も影響を与えない」がそれぞれに一一・九%、一〇・七%もあることは注目される。

春闘への関心は低下

春闘にたいするイメージでは、「わからない」と答えた者が三五・四%ともっとも多く、ついで「組合員の労働条件を向上させている」三一・二%、「労使間で企業経営についての共通認識をもてる」二六・一%、「労働組合のない企業の労働条件向上に役立っている」一一・一%、「労使間で産業動向についての共通認識をもてる」一〇・六%、「労使間で日本経済についての共通認識をもてる」八・二%。現状の春闘を反映して、①春闘への関心の薄さ、②春闘が企業の側からする労働者「統合」の道具となることが現れている。

組合は頼りにならない

電機連合調査では「労働組合は頼りになっているか」とまっこう上段から振りかぶる。答えは「頼りになつていない」八・八%、「どちらかといえば頼りになつていない」二九・一%。これにたいし「頼りになつていない」九・六%、「どちらかといえば頼りになつていない」一三・一%で、「頼りになる」三七・九%と「頼りにならない」二二・七%、「どちらともいえない」が三六・一%で拮抗状態にある。連合をけん引する電機ですら、労働組合員の目はさめている。

これを組合活動に対する組合員の評価に移すともっとはつきりする。「リストラ対策・雇用」については「よく取り組んでいる」一四・七%、「どちらかといえば取り組んでいる」四九・四%にたいし、「まったく取り組んでいない」七・四%、「どちらかといえば取り組んでいない」二六・六%で、六四・一%対三四・〇%の比率になる。この背景にある「経営方針・施策のチェック」では、「よく取り組んでいる」四三・三%なのに、「全く取り組んでいない」一〇・八%、「どちらかといえば取り組んでいない」三七・六%で、支持する者と支持しない者との比率は四九・五%対四八・四%にもなる。

明るく、楽しくするために

組合はどう改革されなければならないかのヒントになる調査はけっして少なくない。電機連合調査は「組合活動は明るく楽しいと思うか」と問う。「そう思わない」三〇・八%、

「どちらかといえば思わない」四七・九%で、「明るく楽しくない」と七八・七%が回答する。「そう思う」はたったの二〇・五%である。

これは「組合離れ」の要素の一つである。UIゼンセン同盟は組合離れの原因と良い組合の条件を問いかける。組合離れの原因として上げられるのが「何をしているのかわからない」三五・四%、「個人生活を重視する組合員が増えた」三〇・八%、「活動がパターン化し新鮮味に乏しい」三〇・七%、「建前的な話が多く本音を避けている」二六・一%、「職場の意見が反映されていない」二五・五%、「役員と組合員との感覚にズレ」二二・〇%、「組合員の力量不足で頼りがいが無い」二二・九%などであるが、「組合活動に何も期待していない」との冷めた意見も一九・二%とけっして無視できない比率を占めている。

「組合が何をしているのかわからない」のは、組合との接点が少ないからで、サービ
ス・流通連合意識調査（〇二年八月、三万七百三十六名）では組合事務所に行ったことがあるかとの間に、「一度も行ったことがない」が四六・六%を占め、「場所がわからない」三・四%を加えれば五〇%にもなることに示される。

UIゼンセン同盟は「良い組合の条件は？」と問い、「組合員のニーズや声を重視」六七・五%、「賃金・諸条件の折衝・交渉力が強い」六一・四%をだんトツにして「組合の方針が明確」四〇・二%、「経営への発言力がある」三四・五%、「経営活動を正確にチェックしている」三四・二%、「職場の苦情処理活動に熱心」三三・八%、「組合員をきちんとリードしている」三一・六%、「組合役員と組合員が情報共有に熱心」三一・四%となっている。

なぜ明るく、楽しくならないか

組合員の意識調査は現状のすなおな声である。そのすなおな声には組合も労働者ももっと向上しなければとの積極的意識が内在しているにちがいない。

問題はこれらの声をもとに現場に足を運び組合員との接点をふやすことである。組合専従役員は会社から大事にされ、組合員より会社幹部と接触する方がはるかに多い。こうして現場とズレていく。連合がいう組合改革、革新は、さまざまな文書を目にしても、労働組合を経営にたいしものわかりよい組合にしようとする専従役員の思惑が働いている。

◇ 読者からのおたより ◇

九千号 全通帯広支部の日刊紙が発行されてから、九千号になったと聞いて素晴らしいと感じました。協病労組の『日刊みんな』も五千号を越えています。編集委員が高齢化し、いつまで続くか不安、発行し続けることが大切と思って頑張る。（協病労組帯広支部「日刊みんな」五七五号）

編集部より 日刊ちゅうたんは一万号を突破のはず。「通信」はようやくと九百号が視野に。さらにがんばって。

よかった！ 「通信」八九三号の赤峰さんの問題提起よかったです。

（東京・M）
編集部より たたかい方は多様です。赤峰流はその一つ。それぞれがそれぞれの条件で創意をつ

くし、運動と財政を一体とすることが重要。それに闘争団員はオルグガナイザーとの自覚です。夜勤一七回 私の夜勤回数は、今月は深三、準六で計九回である。同じ詰所でも科が違つと深六、準八計一四回の人もいます。どこの職場も欠員で困つて居ると思ひます。新採用者が入る四月を待つしかないのでしょうか。欠員が増えてくる……日勤は、日曜日だけあり、他は夜勤か休みで月一七回もした昔を思い出した。そんな月の休日は体を休める、ただ寝ているだけの日、体の回復する暇もなく、次の夜勤となり働き始めていた。もう、こんな勤務は忘れてしまいたい。今の勤務は入院がなく、日常業務を終るだけなら超勤はそれほどないはず。だから、入院や急な看護に対応できるだけの人員を配置して！そして超勤を、また夜勤回数を月八回まで減らせる勤務にして。充実感が欲しい！

(医療労働者)

「忠魂碑」強制清掃問題 巨大な銅製の弾丸の形をした物もあれば、石碑もある。共通しているのは、巨大であること、皇紀二六〇〇年とか、〇〇大将の筆跡とか、神社内のよく見える所に設置されていることだ。Y市では、この忠魂碑のある神社(の特に忠魂碑の周辺)の草取りや清掃を年に二度やつていた。町内には忙しい人もいたり、そんなことをやるいわれもないし、やりたくない人もいる。そこで「嫌だ」と言つたら二千円出せと言われた。そこでさらに「嫌だ」と言つて市に「なぜこんな強制があるのか」と尋ねたら黙殺された。こんどは県にまで出掛けたら、「それは市や町の問題だ」と逃げられた。この話を、オンブズマン運動をしている知人から聞いた。今でも、この清掃は続いているそう。まさにこれは「草の根」の靖国神社の問題であり、草の根ナシヨナリズムである。このエピソードは、いうまでもなく『社会通信』八九〇号の巻頭言が示唆していることと「根っ子」は同じである。

(茨城・M)

編集部より 民主主義なんてクソクラエの風潮が権力をつかつて進行中。恐くなつてくるのは共産党員のビラ配布での逮捕、そして自衛隊官舎への反戦ビラ配布での事件、さらに日の丸・君が代の強制。おたよりの延長です。

賃金・手当削減 当自治体労働者にも三年間賃金三%、手当〇・二%削減が年明けより提案されました。合併をふくめ他町村水準に引き下げ、労使ともに痛みを分かち合い、財政再建で乗り切るという強気の市長。職場生産点からますます拡がる団結づくりを模索しています。

(鶴岡・M)

編集部より 財政難、市民の声、お役所いじめで労と「使」が根本的に対立するとの主張が本当に少なくなりました。〇四年春闘はその典型です。

よかつたですね 北海道国労闘争団激励・交流の旅、大成功だったようですね。今度は名寄へ来てください。

(北海道・T)

編集部より ホント大成功。紋別に回つた仲間の状況について、紋別の仲間から「四国の人たちはほとんどが厳寒の北海道は初めてで、結氷したサロマ湖の上でアザラシのまねをしたり、雪の上ではしゃぎ回つたり、渚滑の海岸で砂浜に残つた流水に乗つたり。見ている方が楽しくなるような喜び方してくれました」との報告をいただきました。紋別は若者中心、名寄は大先輩中心でしたから、雰囲気も違つたでしょう。私は稚内です。

いよいよ追い込み めつきり春らしくなってきましたが、いかがおすごしでしょうか。私方いよいよ残り時間が少なくなってきました。多くの人々に支えられながら頑張っています。決意した以上何としても闘い抜きたいと思ひます。最後までのご支援をよろしく願ひします。できましたら二〇日の「励ます会」へご参加ください。

(広島県福山市・西本 章)

編集部より のつびきならぬ出来事が起き出席することができず残念。とにかく勝つて！

記・紀 今『日本書紀』および『古事記』を勉強しています。牛久史談会での次回のテーマ。貴兄も先日「読んだよ」と言つてましたね。今度はこれについても交歓し合いたいですね。(茨城・M)

編集部より 私が紀記を読んだのは、「日の丸・君が代」法制化の時。何で今頃、国旗・国歌法なのか、政府・自民党は何を目論んでいるのか。田辺聖子の『古事記』を入門書に岩波文庫でした。ご意見を 久しぶりに「資料」を送ります。流れに流されないようにと思ひながら、労働組合執行委員が続けていますが、でも流されてしまつている自分を反省する毎日です。今後努力は続けていきます。送つた諸資料に対する「意見」「批判」「アドヴァイス」等をいただければ幸いです。

(東京・C)

編集部より よく出されてますね。いつも感心させられています。組合員の気持ちがよく分かり、勉強になります。今から地方へ。列車の中で読ませてもらいます。